いのちと地域を守る

河北新報社、防災・減災ページ新設

東日本大震災の教訓をどう生かし、「次」の地震・津波にどう備えるのか。河北新報社は読者と一緒に災害対策を考え、備えへの意識を高めて行動に移すため「防災・減災のページ」を新設します。「いのちを守る」「地域を守る」がテーマです。

いのちと地域を守るため、地域に密着し、住民とワークショップを展開していきます。家庭でできる地震への備えは何か。自力での避難が難しい要援護者をだれが助けるのか。避難誘導に当たる消防団、民生委員の安全対策は…。具体的な課題について、現場で参加者を交えて掘り下げ、検証します。

東北が度々、巨大地震や大津波に見舞われてきたことは、歴史が伝えています。平安時代の貞観（じょうがん）地震（869年）では津波が仙台平野にも押し寄せ、約1000人がのみ込まれました。江戸時代の慶長三陸地震（1611年）では、津波により5000人余りが犠牲になったとされています。東日本大震災により、過去の災害の記録と教訓を学ぶ大切さをあらためて思い知らされました。

過去に学び、未来に伝える紙面とします。「防災・減災のページ」は東日本大震災が発生した「3・11」を忘れないために、毎月11日に掲載します。

地域課題　多角的に

「防災・減災のページ」では、沿岸部での津波対策のほか、都市部のマンションの安全対策、中山間地での高齢者の救助など、さまざまな地域で多角的に問題を探ります。

今回の震災で浮き彫りになった課題をあらためて検証します。東北大災害科学国際研究所のメンバーが中心となり、生活面での最も最新の地震研究内容を伝えるコーナーも設けます。

住民がどう自らの命を守ったかに焦点を当てた地震・津波の体験談も掲載する予定です。

■情報をお寄せください■

「防災・減災のページ」に意見や感想、取り上げてほしいテーマ、防災情報をお寄せください。宛先は〒980―8660仙台市青葉区五橋1の22の28、河北新報社報道部「防災・減災のページ」係。ファクスは022（211）1256。電子メールアドレスはbousai@po.kahoku.co.jp

行政・研究・地域・報道　座談会

共助の地域づくりを

たなか・れいじ　能代市出身。明治大学政経学部卒。1986年から東北工業大教授。仙台市八木山防災連絡会会長として若者参加型の防災活動を進めてきた。専門は建築工学。71歳。

―震災を踏まえた教訓は何でしょうか。

今村　災害の規模はさまざまです。行政、地域、専門家は対策を練る以上、想定する規模を定め、それに応じた備えを行う。例えば、地震、津波、火山噴火などの自然現象の場合も被害の大小、発生の頻度などを考慮して、校舎の高さを地盤に上乗せすることはしていませんでした。高い所に逃げるべき場所を定めるなどの工夫が必要だと思います。

田中　「防災」の言葉自体が、「災害を防ぐ」という意味に受け取られてしまうこともあります。「減災」という言葉を使うことで、被害を最小限にとどめる意味合いが強くなります。

大江　「減災」の言葉は、阪神・淡路大震災の教訓から生まれました。「防災」という言葉を使うと、「自分は大丈夫だ」と思ってしまう。「減災」という言葉を使うことで、自分の命を守る意識を高めることが大切だと思います。

―地域の防災力を高めるにはどうすべきか。

大江　避難の方法を見直す必要があります。最初から、海から遠い高い場所に逃げて安全を保ちたければいいのです。あとは物資の調達です。食料の備蓄は必要だと思います。

田中　避難訓練は学校の校庭に行うだけで、校舎の必要な階に上がることはしていませんでした。高い所に逃げるべき場所を定めるとともに、それに応じた備えを行う。備蓄・訓練しなければなりません。

大江　避難の方法を見直す必要があります。最初から、海から遠い高い場所に逃げて安全を保ちたければいいのです。あとは物資の調達です。食料の備蓄は必要だと思います。

田中　「防災」という言葉を使うことで、校舎の必要な階に上がることはしていませんでした。高い所に逃げるべき場所を定めるとともに、それに応じた備えを行う。備蓄・訓練しなければなりません。

今村　鳥海川が氾濫する恐れがあったとき、「避難者を傍観者にしてはいけない」と思いました。「避難者を傍観者にしてはいけない」と思いました。

田中　「防災」という言葉を使うこと